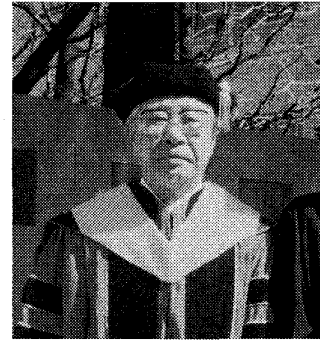


# 生活機構研究科博士課程 発足当時の事ども

昭和女子大学名誉学長  
福場博保



昭和女子大学に大学院家政学研究科修士課程が設置されたのは昭和61年4月で、当時私は文部省大学学術局の大学設置審議会委員を委嘱されておりましたので、早川家政学部長からこの家政学研究科の設置認可に関してお手伝いするように頼まれ、昭和59年頃から一応ご相談に与っておりました。

昭和学園としては、既に昭和49年に大学院文学研究科が開設されており、約10年の運営経験があったため、家政学研究科認可の為に必要な書類の作成なども短期間で完成し文部省に提出できたと思っております。外部環境としては、永年にわたり文部省内に存在した新制私立大学では家政学などの新しい学問分野には大学院の設置は認めない等の制約も、既にお茶の水女子大学等の国立大学に家政学研究科が存在している等の環境変化が有効に働き、生活造形学専攻と食物栄養学専攻の2専攻からなる家政学研究科修士課程の大学院が短期間で認可書の交付を受ける事が出来ました。唯7講座で構成されている生活造形学専攻にとって生活造形史講座が家政学大学院として固有の講座であるか否かが審査委員から問題点として指摘され、食物栄養学専攻では栄養生化学講座の専任教授の補充が要求されています。しかしこれらの指摘点も容易にクリアでき前進が出来ました。

昭和62年4月に昭和学園に着任した私は人見学長から「本学の創設者は昭和は幼稚園からドクター迄の一貫教育の場であるという信念を持って教育にあたられた。今後は博士コースの設置認可に向けて努力するように」との依頼を受けました。当時文学研究科は修士コース10数年の経験がありますから、ドクターコース申請の資格がありましようが、未だやっとならぬと修士2年生が誕生したばかりの家政学研究科にとっては夢物語然とした宿題に思われました。しかし、学長からは来年家政学研究科を卒業する学生が更に上級の研究機関に進学したくても行くべきドクターコースがないではないか、彼女達の進むべき受け皿が必要であると説明され、文学研究科の長野科長及び家政学研究科の早川科長を中心に連日会議を開き協議をいたしました。未だ赤子に等しい家政系は、お茶の水女子大学が全学一本で設立している人間文化研究科に見られるように文学系と合体して全学的なドクターコースを成立させようと目論見、文学系は逆に文学系・家政科別個に申請することで文学系の生き

残りを画策され、中々協議は纏まりませんでした。しかし幸いにして文部省側で新制大学に家政学ドクターコースを認可する動きが見られるようになり、二本立てで申請し、全国で数校認可された家政系ドクターコースの一つとして認められました。名称に就いては紛糾したのですが、当時私が属していた日本学術会議の人間科学委員会の提言を松本学監にお見せしたところ、この提言の主旨が新しく認可申請しようとしている新ドクターコースが具体化しようとするものと合致すると考えられ、生活機構研究科というコース名称が決まったという一件、或いは文部省の審査直前に大野先生が急逝され、急遽担当教員の差し替えをした軽業に近い思い出深い突発事件等もありました。

家政系大学院が昭和学園に設置されてから既に20年が経過していますが、この20年を振り返ってみます時、創立者である人見園吉先生及び後継者である人見楠郎先生の教育に対する情熱と計画性に敬服させられます。

人見園吉先生は以前から大学院教育の必要性を強調してこられ、昭和45年の創立50周年記念式典後直ちに大学院開設を目標に必要校地の買収や教授陣の整備を開始され、大学院設置審査会による文学研究科の審査会を二日後に控えて他界されています。その後を継がれた人見楠郎先生はドクターコース設置認可獲得の為に第2次教育5ヶ年計画を立案され、校舎の新築、増改築による教育・研究環境の向上改善を計られると同時に、女性文化研究所等の研究機関の新設を図り、研究・教育機関としての機関整備を進められ、その機能発揮を容易にされた事が大学院認可を促進されたと思っています。

この歴史を持つ大学院が附属研究所としての女性文化研究所共々今後更に発展し、人類の文化と福祉の向上に寄与される事を望みます。

(元昭和女子大学学長)